

モンゴル時代の世界地図 文明圏を超えて

杉山 正明

京都大学大学院文学研究科 教授

はじめに

西暦13・14世紀，人類史上で最大の版図を形成したモンゴル帝国を中心に，ユーラシアと北アフリカは，ゆるやかではあるものの，ひとつにまとめあげられた。この時代をモンゴル時代と呼ぶ。この考えは，本田實信の命名に始まり，近年とくに日本で唱えられ，徐々に世界の歴史研究者たちにもひろまりつつある。いわば，日本発の世界史概念である。

モンゴル時代には，ラシード・アッディーン『集史』をはじめ，それまでの文明圏の枠をこえて，真の意味での「世界史」叙述があらわれる。それとともに，アフロ・ユーラシア規模ではあるが，やはり人類史上でかつてない「世界地図」がつくられる。しかも，ユーラシアの東と西で連動するように，それぞれ注目すべき地図がひとつづつ今に伝えられている。それらは，ともどもに人類がはじめてひとつの全体像で「世界」をとらえだしていた紛れもない証拠となる。

I ふたつの『混一疆理歴代国都之図』

まず，アジア東方での「世界地図」として，『混一疆理歴代国都之図』をとりあげたい。従来，龍谷大学図書館蔵本が名高く，とくにそこで描かれる日本列島が倒立していることが多くの人々の興味をよび，小川琢治・内藤湖南をはじめ，最近にいたるまで，じつに多くの学者がこの図に言及してきた。ところが，1987年，長崎県島原市の本光寺（旧島原松平藩の菩提寺）に，内容はほぼ同じで，ひとまわり大きい別の図が蔵され

ていることが知られるようになった。龍谷図も本光寺図も，ともに壮大な一枚図であり，共通の祖本にさかのぼることは疑いない。発表者は，両図について研究用のカラー写真を撮影し，それらをもとに分析・検討をくわえつつある。

写本が2種類になったことにより，より多角の分析が可能になるいっぽう，本光寺図の日本列島が本来の形で描かれていることから，かつてのような「邪馬台国論争」にかかわる議論は影を薄くした。両図の検討の中間報告として，現在いえることは次のような点である。

1. この地図は，モンゴル時代以前の中華地図の伝統のうえにまずある。ついで，モンゴル治下の中国という特別な時代環境のなかで出現した2種の原因がもととなり，さらに李朝朝鮮の初期にあたる1402年に，現在のかたちとなった。いわば，三重構造のものとして，いまわれわれのまえにある。従って，この三重構造をふまえて分析する必要がある。
2. とはいえ，なんとといっても，この地図に示されるアフロ・ユーラシアは，まさにモンゴル時代だからこそありえた大地平である。中華地域に大量に記入される地名のほとんどは，モンゴル時代の1320～30年ころのものである。また，中央アジア・中東・アフリカ・ヨーロッパの地名については，3割程度はすぐにわかるものであるが，のこりの解読は容易ではなく，今後の課題といわざるをえない。
3. 巨大な陸地とは別に，画面にむかって右方（東），下方（南），左方（西）にひろがる海原の大きさが注意される。こうした海への明確な視線は，それ以前の「世界図」に見られないものであり，陸海が完全にリンクした形でのアフロ・ユーラシア規模の交流・通商が実現したモンゴル時代の現実を反映したものでろう。

4. いっぽうで、この地図は、中国歴代の国都をはじめ、14 - 15世紀の当時においてすでに過去の地名となっていた内容も含む。いわば、現勢地図であって歴史地図である。時空を一枚のうちに圧縮して表現するのは、すでにモンゴル時代の原図においてそうであった。世界を世界としてとらえ、かつその時にまでいたる歴史を総述しようとする精神は、モンゴル時代のペルシア語史書だけでなく、漢文文献にも認められる。

II 『カタルーニャ地図』が語るもの

かたや、ヨーロッパにおいては、『カタルーニャ地図』(英語では Catalan Atlas)がある。パリのフランス国立図書館に蔵されるこの地図は、1375年アラゴン連合王国が支配するマヨルカ島の主邑パルマでつくられた。フランス王シャルル6世が、アラゴン王家のペドロ4世に依頼して、当時のヨーロッパで最高の地理学者・地図製作者であるアブラハム・クレスケスとジェフダ・クレスケスの父子につくらせたものであった。東の『混一疆理歴代国都之図』のモンゴル時代中国での原図が、あくまで“民間むけ”“一般用”であったのになら(モンゴル政権そのものは緯度・経度もきちんとしたユーラシア地図をもっていたと考えざるをえない)、西の『カタルーニャ地図』は、特別な需要による“とびきりのもの”であった。

従来、この『カタルーニャ地図』は、ヨーロッパの「中世」の世界図であるOT図を脱し、実際の地形を写しとった海図であるポルトラーノ地図が出現する14世紀での流れをうけた画期的な「世界地図」だといわれてきた。『カタルーニャ地図』の名は、つとに世界的にしられ、その研究もふたつの代表的なものがある。だが、モンゴル時代史という観点から、この地図の内容を検討すると、以下のような見解・課題が浮かびあがる。

1. 全体が8葉からなるこの地図は、地中海世界を中心とする西方について4葉、中東から中国にいたる東方についても同じく4葉をあて、東方と西方で「世界」が両分されているかたちを採る。それは、当時のヨーロッパにおける“世界観”であった。
2. 西方の4葉については、実に正確で、来るべき大航海時代へ直接つながる合理的な地理知識が、すでに成立していたことがわかる。いっぽう、東方の4葉については、これまでマルコ・ポー

ロの知見をもとにしているといわれてきたが、それはいくつかの点で疑わしい。この地図の東方についての地名・地形・人物像などは、今後の究明すべき課題といわざるをえない。だが、総じていえば、モンゴル時代のヨーロッパにおいて、東方に関する知識が格段にレヴェル・アップしていたことはまちがいない。

3. ここに描かれる東方と西方は、陸上ルートと海上ルートの両方でむすびつけられていたことが図中の陸上キャラヴァン、海上の貿易船で示される。14世紀になってとくに活性化する地中海交易といわゆるルネサンスは、こうした時代環境のなかで成立したことが明示されているわけである。それは、モンゴル時代の東西文献、たとえば14世紀前半のフィレンツェでしるされたペゴロッチェ『商業指南』や『ヴァッサーフ史』以下のペルシア語史書、さらに近年に質量とも面目をあらためた元代漢文文献などから推定される大状況とよく一致する。

III ふりかえるべき時

この両図の検討を通じて、モンゴル時代に「世界」についての人類の知見が、それまでとは別の段階に達していたことは明らかである。近代西欧を中心に語られたきた人類史のストーリーは、すくなくともこの点に関しては見直さざるをえないだろう。なお、以上についての現時点での報告は、近刊予定の拙著にて述べる予定である。

(A04「古典の世界像」班)

